

研究ノート

河内本源氏物語の改竄―尾州家本古写巻初期十一帖を中心に―

田村俊介

富山大学人文科学研究第83号
2025年9月
抜刷

河内本源氏物語の改竄―尾州家本古写卷初期十一帖を中心に―

田村 俊介

第一章 『中古文学』第九四号の問題提起

久保木秀夫氏は、『中古文学』第九四号「所収「定家本・青表紙本『源氏物語』は、どれだけ実際に読むことができるのか？」で、次のように述べている。

……定家本に拠って『源氏物語』を読んでいこうとすることに、誰もが納得できるような必然性がこれといてないのであれば、別に定家本に拘って底本を選定したり、本文を校訂したりしなくてもよいのではないか、とも思えてくるが、いかがであろうか。／ただしそう考えてみたところで、いわゆる青表紙本系統以外の伝本を底本にした校訂・校注テキストが、実際にはひとつも提供されていない、という現実的な問題が、実はある。以下、論者がこれまで具体的に携わってきたわけでも、これから携わっていくわけでもない、さらに無責任な発言となってしまうが、例えば河内本の校訂・校注テキストすらないという現状に、個人的には、少々驚いている次第である。

しかし、河内本の校注書をこれから作成してゆくことが必要という考えは、一九九四年の吉岡曠氏『源氏物語の本文批判』²を充分に読みこなしていないところから出て来たのではなからうか。河内本の校注書の作成を唱えるなら、吉岡氏に充分な反駁を加えてからにすべきだと思う。

久保木氏が「一体どれほどの説得的な論拠があつて、定家本なり、いわゆる青表紙本系統の伝本なりを、研究の中心に据えていくこととなつたのか、確かに論者などにもよくわからぬ」と述べているのも、吉岡氏の研究書を読んでないからである。

仮に、「河内本のほうが青表紙本よりも、紫式部の原本に近い」という説を唱える方がいらつしやったら、その方は、吉岡氏の著書を否定していることになる。しかし、「河内本と青表紙本、どちらが紫式部の原本に近いかわからない」とおっしゃる方にしても、その方も吉岡氏の著書を否定していることになる。吉岡氏の著書、少なくとも第一章はこの上なく論旨明快なのである。

吉岡氏は、研究書の第一章「桐壺卷異文考証」の第一節第二節で、青表紙本／河内本の異同箇所を挙げ、青表紙本の古態性、河内本の非古態性を考証している。例えば、第一節の「語意に関する有意異文」のコーナーの次のような異同箇所である。まずは青表紙本の本文を挙げ、その一部に傍線を引き、その部分の河内本本文をパーレン括弧に包んで示している。青表紙本は原則池田本、河内本は原則尾州家本によって代表させている。末尾の漢数字は『源氏物語大成』の頁数、アラビア数字が行数である。

3 御をくりむかへの人のきぬのすそ（裳きぬのすそ）たえかたくまさなき（さかなき）こともあり（事ともおほかり）（七・七）。三箇所異文があるが、当面の問題は「まさなき（さかなき）」の箇所である。「さがなし」は「さがなき」の二例もふくめて源氏物語に全部で二〇例あるが、九例が「物言ひさがなし」の形で、〈物の言い方が穏当を欠く、口が悪い〉の意、残りの一一例はすべて人間の性質について、〈たちがよくない、意地が悪い〉の意である。つまり対象は人間の性質と物言いとに限定されており、河内本のように人間の行為や事跡について「さがなし」というのは中古語としての本来の用法からはずれている。

【略】

8 いまゝてとまり（と、まり）侍かいとうきを（二・二・三）。

「とまる」と「とどまる」は類似の意味をもつ言葉だが、語源は別で、用法も微妙に異なるらしい。源氏物語で、〈生き残る〉の意で用いられた「とまる」の用例は複合語を除いても二七例ほどあるが、「とどまる」が〈生き残る〉の意で用いられた例は皆無である。

このうち、8番については、吉岡氏の言うことに強い説得力を感じるものの、画数が少なく小さく字がつかい混入し

てしまうものである。尾州家本の書写者、若しくは、尾州家本の親本の書写者が「とまる」の「と」の直後に踊り字をついいうっかり混入させてしまった可能性を排除できないため、河内本系の非古態性・青表紙本系の古態性の根拠とするのは、私は躊躇する。

また、第二節の43番の「……大液芙蓉未央柳……／……大液芙蓉……」の異同箇所については、新美哲彦氏『源氏物語の受容と生成』³の第二部最後の単元で触れられているが、私も、この箇所だけを見て、河内本の非古態性を断定することはできないと思う。

しかし、3番については、二〇例の「さがなし」の用例に基づいており、結論が揺らぐことは今後ともない、と考える。

ここで、「紫式部の原本に、草書・中書・清書があった」という言説を発信する方々に問いたい。あるにはあったのだろう、その草書を第一稿、中書を第二稿、清書を第三稿と呼ぶことにして、3番の異同について、次の四つの想定のどれをお選びになるのか。

【第一想定】

第一稿第二稿 さかなき 第三稿 まさなき

【第二想定】

第三稿 さかなき 第一稿第二稿 まさなき

【第三想定】

第一稿 さかなき 第二稿第三稿 まさなき

【第四想定】

第二稿第三稿 さかなき 第一稿 まさなき

私は、第一想定から第四想定迄のいずれをも選ばない。紫式部なら第一稿でも第二稿でも第三稿でも、もしあったのなら第四稿でも、「まさなき」と書いて、「さかなき」とは書かなかったと思う。「そもそも紫式部の時点で複数の『源氏物語』がある」という話と、現存しているのが、青表紙本系『源氏物語』と河内本系『源氏物語』と別本『源氏物語』諸本であるという話は、分けて考えたい。鎌倉中期ごろまで、紫式部の第一稿か第二稿か第三稿かのいずれかが、おおむねそのまま伝わり、それを意識的に書き替えた写本が河内本、少なくとも桐壺巻については意識的に書き替えたのが河内本、誤字脱字の点を抜かして忠実に伝えているのが青表紙本であると推測し

ている。

話が逸れたが、第一章第一節の前半で「語意に関する有意異文」が集められたコーナーでは、3番の異同箇所のとときと同様に、当該語の語義・ニュアンス・用法を、当該巻以外の五十三の巻と、当該巻の他段落、加えて、極めて短い作品であるため有効な用例が見つからない場合も多いが『紫式部集』、『紫式部日記』から用例を列挙し、探り出し、それに基づいて物を言うという姿勢で一貫している。以下、この姿勢のことを「五三の巻と当該巻他段落主義」と略称する。11番の異同箇所に関しては、拙稿「陽明本源氏物語後編の改竄」⁴で触れたように、「かたはし」という青表紙本の本文、「かたへ」という河内本の本文、それぞれについて、語義・ニュアンス・用法を帰納的に割り出し、河内本の非古態性、青表紙本が河内本と比べたら古態性を持っていることは間違いないという結論を出していらっしやるようである。4番では「さしこめ／さしかため」、14番では「たちはなれにくき／たちはなれかたき」、15番では「やつ」す、16番では「さがな」し、18番では「おほしいとな（む）／おほしいたつ（く）」、19番では「ねんしかへ（す）／おほしかへす」、21番では「つ、まし／はつかし」に関して、五三の巻と当該巻他段落主義にのっとって、河内本の非古態性を述べている。更に、第一章第二節の47番の異同は、第一章第一節前半に収められていないにも拘らず第一章第一節前半と同じような手法で、平安時代の語法に基づき、「みたてまつりなやむ」という本文を持つ河内本の非古態性、「みたてまつりなけく」という本文を持つ青表紙本の古態性という結論を出していらっしやる。

第一章第二節の62番の異同、69番の異同に関しては、五三の巻と当該巻他段落主義にのっとっているように見えないけれども、あまりにも、河内本側の非古態性が明らかではないか。

一つの巻に関して、十数例の根拠がある以上、巻全体の性格として、河内本の非古態性を主張して構わないのではないか。次章では、第二帖以下の巻々の有意本文同士の異同箇所を挙げ、検討してゆく。改行の際は、／で示すことにする。

第二章 第二帖以下の巻々の異同箇所

青表紙本の引用は、古代學協会・古代學研究所編『大島本源氏物語』⁵、河内本の引用は、『尾州家河内本 源氏物語』⁶に拠る。

〔異同箇所その1〕

青表紙本菊をおりて／ ことのねも月もえならぬやとなからつれなき人をひきやとめける（帚木卷第二十七丁オ一―二行目）

／河内本きくをおりて／ ことのねもきくもえならぬやとなからつれなき人をひきやとめける（第22丁オ一―三行目）

青表紙本が古態性を持つていること、河内本は、「月もえならぬ」を「菊もえならぬ」に書き替えたこと、吉澤義則氏が「帚木卷」ことの音も月もえならぬ」の釈⁷で述べている通りである。

なお、本拙稿で言う「河内本本文」とは、現在、一般に「河内本本文」だと思われるものであることをお断わりしておく。

〔異同箇所その2〕

青表紙本いまひとりハひむかしむきにてのこる所なくみゆしろきうす物のひとへかさね二あひのこうちきたつものないかしろにき
なしてくれなるのこしひきゆへるきハまてむねあらハにはうそくなるもてなしなりいとしろうおかしけにつふ／＼とこゑてそゝろ
かなる人の頭つきひたいつきものあさやかにまみくちつきいとあいきやうつきはなやかなるかたちなり（空蟬卷第三丁ウ五行目）
第四丁オ三行目）／河内本いまひとりハひむかしにむきてのこりなく見ゆしろきうすものゝひとへかさねふたあゐのこうちきたつ
ものないかしろにきなししてくれなるのこしひきゆへるほとまてあらハにすこしはうそくなるもてなしなりいとしろうおかしけにつ
ふ／＼とこゑてそゝろ、かなる人のかしらつきひたいつきものあさやかにはなやかなるかたちなり（空蟬卷第三丁オ八行目）ウ三行
目）

後に「なに心もなくさやかなる」とあるから（青表紙本も、ウ音便を除いて同文）、①「胸あらはに」の「胸」と②「まみ、口つきいとあいぎやうづき」が抜け落ちていないほうが原型だろう。①と②のうちの一つだけ脱落しているのなら、ついうっかりの脱落である可能性を排除できないが、①と②の両方が脱落しているのは、恣意的に削除した結果であろう。

「異同箇所その3」

青表紙本なに心もなうさやかなるハいとおしなからひさしうみたまふ（は）まほしきに（空蟬巻第五丁ウ二〇四行目。訂正のための線も記した。へ）内は補入された文字。以下同じ）／河内本なに心もなくさやかなるハいとをしなからこまかに見たまハまほしきに（第4丁ウ六〇七行目）

この垣間見の場面、見られているのは軒端萩と空蟬である。空蟬を記述する部分、青表紙本も河内本も同文で、「こまかに」記述されている。軒端萩については、異同箇所その2のところで見たように、河内本のほうがやや詳細でなくなっているのであるが、それでも、「さやか」に見られた、と言ってもいい。今度の機会には、もっと「こまかに」見たい、というのはおかしい。

「異同箇所その4」

青表紙本むつかしけなるおほちのさまを見ハたし給へるに（夕顔巻第二丁オ七〇八行目）／河内本むつかしけなるおほちかなと見たしたまへるに（第1丁オ七〇八行目）

「見た」す、という動詞が使われている以上、その道の複数の箇所を見なくてはなるまい。青表紙本のように、「大路のさまを」見る、ならそのことは可能である。しかし、河内本のように、「大路かなと」見るでは、その道の一つの箇所を見て、その瞬間、そう感じたという印象が与えられてしまう。

「異同箇所その5」

青表紙本くちをしの花の契やひとふさおりてまゐれとのたまへハ（夕顔巻第二丁ウ三〇四行目）／河内本くちをしのはなのちきりやとてひとふさおりてまいれとおほせたまへハ（第2丁オ九〇一〇行目）

「おほせたま」ふ、は不自然。

「異同箇所その6」

青表紙本三月になり給へハいとしるきほとにて人／＼見たてまつりとかむるにあさましき御すくせのほと心うし人ハ思ひよらぬことなれハこの月までそうせさせ給ハさりける事とおとろききこゆわか御心ひとつにハしるうおほしわく事もありけり（若紫巻第

三十二丁ウ一（七行目）／河内本三月ハかりになれハしるく見たてまつりしこと、もありて人ハおもひもよらぬことなれハいま、てそうせさせたまハさりけること、きこゆるにあさましかりける御身のすくせのほといか、おほし、らさらん（第25丁オ一一行目）ウ四行目）

この異同については、浅尾広良氏「河内本源氏物語の校訂方法——若紫巻を中心として（下）——」で、取り上げられている。

藤壺の妊娠の兆候に対する周りの反応と藤壺の想いが対比的に語られるところに、大きな違いが現れる。青表紙本にある「人／＼みたてまつりとがむるに」「心うし」「おどろき」「わか御心ひとつには、しるうおほしわくこともありけり」といった内容が、河内本ではすべて捨象されているのである。青表紙本では周りの反応と藤壺の想いが、二度に渡って繰り返し対比的に語られ、いずれも藤壺が内省する文脈で締める。一方、河内本は、それらを整理して一度の対比的な文章にまとめて語るだけでなく、最後は藤壺の心境ではなく語り手が藤壺の心境について言及する草子地になっている。これも、青表紙本がもっている細かで複雑な登場人物の心の揺れが、河内本ではかなり単純化されているとみてよい。

浅尾氏の言う通りなのであるが、ここで私が着目したいのは、「おどろききこゆ（青表紙本系大島本）／きこゆる（河内本系尾州家本）」の異同である。青表紙本系大島本では、女房は、三ヶ月にも成って、夫である桐壺帝に報告していないことに、驚きつつ、そうした夫婦のあいだの立ち入った質問を口に出してしていない。「おどろききこゆ」の「きこゆ」は補助動詞である。ところが、河内本系尾州家本の「きこゆる」、終止形で言う「きこゆ」は本動詞である。「何故、三ヶ月にも成るのに、桐壺帝に報告なさらないのですか」と女房が、藤壺に、口に出して質問したことになる。加えて、「わが御心ひとつにはしるうおほし分わく事もありけり。」は、藤壺だけは、腹に宿している子が光源氏の子だとはっきり分かつていた、という内容であって、私は必要不可欠であると思う。

また、

「異同箇所その7」

青表紙本いか、たハかりけむいとわりなくてみたてまつるほとさへうつ、とはおほえぬそわひしきや（若紫巻第三十丁ウ七／八行目）／河内本いか、たはかりけんいとわりなきさまにて見たてまつりたまふ（第24丁オ三／五行目）

について、浅尾氏は、次のように述べている。

光源氏が王命婦の助けを借りてやっと藤壺に逢えたという場面では、青表紙本には「ほどさへ、うつつとはおぼえぬぞわびしきや」と光源氏が藤壺と密会している時の心理を語り手が代弁する草子地がある。しかし、河内本ではこれが一切ない。青表紙本がもつ緊迫感と実感が伴わない満たされない光源氏の思いが、河内本では緊張感のみとして語られるのである。

しかしながら、その直後の光源氏の詠歌「見ても又あふ夜まれなる夢のうちにやかてまきるゝわか身ともかな」(第三十一丁ウ一、二行目)(この部分に関しては、河内本系尾州家本も同文)の第三句の「夢」を理解する上で、草子地にある、「現実」(「夢」の反対語)とそれを打ち消す言葉は、必要不可欠であるように私は思うのである。

以下、浅尾氏前記論文及び「河内本源氏物語の校訂方法―若紫巻を中心として(上)―」で取り上げられていない若紫巻の本文異同に着目して行きたい。

「異同箇所その8」「異同箇所その9」「異同箇所その10」

青表紙本又の日もいとまめやかにとふらひきこえ給ふれいのちひさくて／

いはけなきたつの一こゑき、しよりあしまになつむ

舟そえならぬおなし人にや(若紫巻第三十七丁ウ九行目、第三十八丁オ三行目)／河内本あしたにも(いと)こまやかにきこえた
まふれいのちひさくて／ いわけなきたつのひとこゑき、しよりあしまになつむふねそえならぬおなし人をや(第29丁ウ三、

六行目)

「又の日も／あしたにも」の異同については、「あした」は河内本製作者が「あした」を翌日の朝の意に限定してしまったために生じた異文であろう。「あした」を翌日の朝に限定する傾向は、吉岡氏前記著三五頁でも触れられている。「まめやかに／こまやかに」の異同は、尼君へのお見舞いなのだから、「まめやかに」が元の形であったのだろう。小さく結んで同封してある結び文が紫上宛てのもので、それに引きずられて、河内本製作者が「こまやかに」にしてしまったのだと思う。しかし、紫上宛ての結びぶみは附録である。手紙の本体について言えば、「まめやかに」のほうが穏当である。和歌の添え詞「同じ人にや／同じ人をや」の異同については、これが『古今和歌集』¹⁰の「堀江こく棚なし小舟漕ぎかへり同じ人にや恋ひわたりなむ」の第四句であることを、『源氏物語』の諸注が一致して

指摘しているので、「同じ人にや」が元の形であろう。但し、この異同箇所その10については、単純ミスに拠って、「に・を」の異同が発生した可能性も排除できない。

〔異同箇所その11〕

青表紙本とハセ給へるハけふをもすくしかたけなるさまにて山寺にまかりわたるほとにて（若紫卷第三十八丁オ五〇七行目）／河内本たまハセたるはけふもすくしかたけにて山さとにまかりわたるほとになん（第29丁ウ九〇一〇行目）

吉田光浩氏も、賀茂真淵『源氏物語新釈』を引用しつつ述べている通り¹¹、死期を察した者が山寺に赴き、そこで死を迎えることは、当時の出家貴族の習慣であつたと考えられる。

〔異同箇所その12〕

青表紙本さハかりいはけなけなりしけハひをとまほならねとも見しほを思ひやるもおかし（若紫卷第二十九丁ウ一〇三行目）
／河内本さハかりいはけなかりしけハひをとまほならさりしかとほのき、しかハほをゑまる（第23丁オ三〇四行目）

「まほ」は「容貌^{かたち}」と共に用いられることが多い。「まほ」な「容貌^{かたち}」なら、顔が良い、「まほ」ならぬ「容貌^{かたち}」なら、顔が悪い、である。夕霧が花散里を評して、

かたちのまほならずもおはしけるかな。（少女卷。第二卷三一五頁¹²）
という一節がある。

このように、「まほ」は視覚に関わる言葉である。

（光源氏を）まほならねど、ほのかにも見たてまつり、世になき物と聞き伝へし御琴の音をも風につけて聞き、（明石卷。第二卷七四〇七五頁¹³）

という用例でも、不完全に見ることを「まほならねど」「見る、と言っている。不完全に聞くことを「御琴の音をも」「まほならねど」「聞く、とは言っていない。「まほならず言ふ」のような言い方で、婉曲に言う、の意になる例も多い）

この異同箇所でも、「まほ」に「見る」が続く青表紙本本文が古態性を持ち、「まほ」に「聞く」が続く河内本本文は、書き替えに拠つ

て生じたものだ」と断定せざるを得ない。¹⁴

浅尾氏の前記「―(上)―」の論文では、定家が作成した本文と親行が作成した本、それぞれの紫式部のオリジナルの本文との距離について、「紫式部のオリジナルの本文をどれだけ残しているかどうかは結局のところ程度の差でしかない。」と述べているが、私は、少なくとも若紫巻に就いては、河内本が紫式部のオリジナルの本文を残さず恣意的に書き替えた本文、青表紙本は紫式部のオリジナルの本文を、誤字脱字は多少あるうが、忠実に伝えているものと峻別できるように思う。

〔異同箇所その13〕

青表紙本らう／＼しうかどめきたる心はなきなめりいとこめかしうおほとかならむこそらうたくハあるへけれとおほしわすれすの給ふ(末摘花巻第十一丁オ二／＼四行目)／＼河内本らう／＼しきかたはをさ／＼なきな、りいとらうたけにおほとときこめかしからんこそあはれならめなとなをおほしやますのたまふ(第10丁オ二／＼五行目)

この箇所の異同に就いては、吉澤義則氏「源氏用筆例その一」¹⁵が参考になる。

(源氏)「らう／＼じうかどめきたる心は無きなめり、いとこめかしうおほどかならむこそらうたくはあるべけれ」とおほし忘れずのたまふ——この「おほし忘れず」は逢つたこともない末摘花に就いて「おほし忘れず」と書く筈はない。それならば、何をおほし忘れずであらうか。如何にも唐突なやうに思はれて一寸まごつく所である。が、此の巻の巻首を見ると「思へどもなほ飽かざりし夕顔の露におくれし程の心地を年月経れどおほし忘れず」と書出して「いかで事々しき覚えはなく、いとらうたげならむ人のつゝましき事なからむ見つけてしがな」と、懲りずまにおほしわたれば」と見えてゐるのを見合して考へれば「おほし忘れず」は夕顔を「おほし忘れず」であることが判然と分るのである。但しこの両文章は十四行廿八字詰を一頁とする本で十頁から離れてゐるのだから、うつかりすると見落してしまふ處がある。

私が青表紙本系大島本と吉澤氏掲出本文とを照合したところ同文であり、河内本系尾州家本も吉澤氏掲出本文と小異があるだけだったので、吉澤氏の説は、本拙稿のテーマを考える上でも有効である。従つて、「おほしわすれす／＼おほしやます」の異同に就いては、「おほしわすれす」が古態性を持つと考える。

〔異同箇所その14〕

青表紙本……中將の君、いかに御らむしけむよにしらぬミたりこ、ちなからこそ／ ものおもふにたちまふへくもあらぬみのそてうちふりし心しりきやあなかしことある御返めもあやなりし御さまかたちに見給ひしのはれすやありけむ／ から人のそてふることハとをけれとたちゐにつけてあはれとハ見きおほかたにハとあるを（紅葉賀巻第三丁オ三行目くウ二行目）／河内本……中將君いかに御らんしけん世にしらぬみたりこ、ちなからこそなときこえたまへり ものおもふにたちまふへくもあらぬ身のそてうちふりし心しりきやとある御かへりめもあやなりし御かたちありさまにえ見たまひしのはすやありけん／ から人のそてふることハとほけれとたちゐにつけてあはれとハ見きとあるを（第2丁ウ三行目一行目）

光源氏の贈歌と藤壺の答歌の場面である。青表紙本の場合、どちらの和歌にも、五から六字の添え言葉があり、河内本の場合、どちらの和歌にも添え言葉がない。藤壺の「おほかたには」という添え言葉は、「恋心抜きでは（あはれとは見き）」という心理であり、必要不可欠だと思ふ。次の巻の冒頭の「大方に花の姿を見ましかば露も心の置かれましやは」（花宴巻第三丁オ一〇くウ一行目）（尾州家本も同文）と通じる心理である。

〔異同箇所その15〕

青表紙本朱雀院の行幸ハ神な月十日あまりなり（紅葉賀巻第一丁オ一く二行目）／河内本朱雀院の行幸ハ神な月のとをかあまりのほとなりけり（第一丁オ一く二行目）

この異同については、清水好子氏『源氏物語論』¹⁶「第四章 紅葉賀」「第一節 紅葉賀・花宴の冒頭の文章について」を参照されたい。

〔異同箇所その16〕

青表紙本女御ハうへの御つほねにやかてまうのほり給にけれハ人すくなゝるけハひなりおくのくるゝともあきて人をともせず（花宴巻第四丁オ四く六行目）／河内本女御ハうへの御つほねにやかてまうのほりたまひにけれハ人すくなゝるけしきなりおくのくるゝともあきて人をともせず（第3丁ウ六く八行目）

〔奥の枢戸も開きて人音もせず〕など聴覚的描写に終始しているので、「けしき」は不適切である。

逆に、視覚に拠ってものを察しているので、「けしき」が必要な箇所、にもかかわらず河内本に「けしき」が無いというのが、

〔異同箇所その17〕

青表紙本うへの御つほねにまひりちかふけしきともしけくまよへハ（花宴巻第六丁オ二（三行目）／河内本うへの御つほねにまいちかふけはひともしけくまよへハ（第5丁オ八（九行目）

である。ここは、視覚に拠って察しているので、「けしき」が原型ではないか。

〔異同箇所その18〕

青表紙本おほしななく（葵巻第一丁オ七行目）／河内本おほしなやめり（第1丁オ六行目）

吉岡氏が著書の第一章第二節の47番の異同について考察、「みたてまつりなやむ」という本文を持つ河内本の非古態性、「みたてまつりななく」という本文を持つ青表紙本の古態性を説いているが、同じ理由で、「おほしなやむ」の非古態性を主張したい。

〔異同箇所その19〕

青表紙本もこよふ（葵巻第三十ウ八行目。文字の抹消アルカ）／河内本もまとふ（第24丁ウ九行目。「と」の箇所に抹消された文字アルカ）

娘の葵上を失った直後の左大臣の悲しみの様子を叙述する場面に現れた異同である。「まどふ」はあまりに、あり触れている。ここは、「もこよふ」という特別な言葉が原型であろう。「と」の箇所の抹消された文字が「よ」であつたら、なお一層、意識的に「まどふ」に書き替えた可能性が強まる。

〔異同箇所その20〕

青表紙本あつまにしらへてかきあはせにきハ、しくひきなすなり（花散里巻第一丁ウ一〇行目／第二丁オ二行目）／河内本あつまをしらへあはせてよし／しくひきなすなり（第2丁オ三（四行目）

「掻き合はせ」は、前奏曲という意の名詞である。そのことを知らない河内本製作者が、このように改竄したのであろう。

〔異同箇所その21〕

青表紙本わかやかなるけしきともして（花散里卷第二丁ウ五〇六行目）／河内本わかやかなるけしきともあまたして（第2丁ウ九一〇行目）

光源氏が花散里の邸に出掛け、途中、中川あたりに寄り道する。その邸の女房達の対応を記した一節である。

「けしき」と「けはひ」は、ここでは両方とも考えられる。しかし、家の持ち主が零落しているはずの邸で、若い女房が「あまた」居るのはおかしい。

〔異同箇所その22〕

青表紙本かのほいのところ（花散里卷第三丁オ七行目）／河内本かのおかしつるところ（第3丁ウ二行目）
中川で寄り道したが、本来の目的地は花散里の邸であった。「本意」の所が原型だろう。

〔異同箇所その23〕

青表紙本これよりまさることもやとおほしなりぬ（須磨卷第一丁オ三行目）／河内本これよります事もやとおほしてぬ（第1丁オ二〇三行目）

光源氏は、都を離れようかどうか、迷っている。その時、都に居ると、今以上に屈辱を味わう、困難な目に遭わされることに
関して、断定的に判断するのはおかしい。「思し果」つ、は原型ではないのではなからうか。

〔異同箇所その24〕

青表紙本いみしからむみちにもをくれきこえすたにあらハ（須磨卷第二丁オ一〇行目）／河内本いみしからむハなれしまにもおくれきこえすたにあらハ（第2丁オ三〇四行目）

光源氏が「流罪」に処せられた、という認識を持った紫上の心内文である。それにしても、「離れ島」はあまりに、中世文学的ではないか。

〔異同箇所その25〕

青表紙本こゝらみるなかにたくひなかりけりとおほししらるゝ人の（御）ありさまなり（須磨卷十三丁オ三〇四行目）／河内本こゝ

ら見るよの中ニたくひなくもありける人の御さまかなとそまられ給(第9丁ウー二行目)

蛭宮と頭中将がお客さんとして来たのに合わせて、光源氏が身なりを整えている際の一コマである。河内本の「目守る」は、見てい
る時間が或る程度長いことを思わせる動詞なので、やはり、原型ではないのではなからうか。

〔異同箇所その26〕

青表紙本おきよりふねとものうたひの、しりてこきゆくなともきこゆほのかにた、ちひさきとりのうかへると見やらる、も心ほそ
けなるに(須磨卷第三十七丁オ六九行目)／河内本おきよりふねともうたひの、しりてこきゆくなともほのかにきこえてた、ち
ぬさきとりのうかへると見やへらる、もさま／心ほそけなる二(第24ウ六八行目)

周知のように、平安時代の「ののしる」は大きな声を出す、が原義である。その声が「ほのかに」聞こえる、という河内本文はお
かしい。

〔異同箇所その27〕

青表紙本 うしとのミひとへにもハおもほえてひたりみきにもぬる、袖かな(須磨卷第三十九丁オ六七行目)／河内本

うしとのミひとつ二物ハおもほえてひたりミきにもぬる、そてかな(第26丁オ二三行目)

第二句の「ひとへ」は、諸注指摘するように、「一重」が掛けられている。河内本の「……ひとつ……」が非古態性を持っているこ
とは間違いない。問題は、字形の類似等により、河内本製作者側が、ついうっかり、「へ」を「つ」と誤写したのかどうか。各巻巻頭
と和歌の部分は、ひとときわ注意深く書写するものである。その可能性は低いだろう。但し、部を字母とする「へ」と川を字母とする「つ」は、
似ることが多い。直前の「ゝたてまつり給へり」の「つ」は、①この箇所の「へ」、②やはり直前の「をいたまへり」の「へ」などと、
酷似している。尾州家本の書風と尾州家本の親本の書風が完全に一致するとは限らないのであるが、一つの可能性として、尾州家本親
本の和歌の第二句「ひとへにもハ」の「へ」の字が、尾州家本の「ゝたてまつり給へり」の「つ」と同じ形であったということは考
えられる。これについては、識者の御教示を俟ちたい。

武田宗俊氏「青表紙本と河内本との本文比較」¹⁷⁾は、青表紙本については校異源氏物語の本文、河内本については尾州家本の本文を

用いて、表題通り、青表紙本と河内本との本文比較をなさっている。私は、青表紙本については、大島本影印を参照し、校異源氏物語の本文との違いを隅付きバーレン括弧に包んで示すことにする、或いは、違いが無い旨記すことにする。また、武田氏の圈点等は省略する。

●第六節の8番

青表紙本池も水草に埋れたれば、いと(1)けうとげになりにける所かな。別納の方にぞ曹司などして人住むべかれど、こなたは離れたり。(2)けうとくもなりにける所かな。【大島本夕顔巻二十六オ7行目↪ウ1行目。違いナシ】／河内本池も水草に埋れたれば怖しげなり。別納の方にぞ曹司などして人住むべかれど、こなたは離れたり。けうとくもなりにける所かな。(二一ノウ)

【尾州家本。違いナシ】

武田氏は、「青表紙本の「けうとげになりにける所かな」は衍で、(2)の一部がまぎれこんだものであろう」と述べているが、私は、岩波文庫¹⁸などが指摘する通り、「ひどく荒れた院内を見る源氏の心内に即した表現」と考えるべきだと思う。

●第五節の3番

青表紙本くれまどふ心の闇も、堪えがたき片端をだに、はるくばかりに聞えまほしう侍を、【大島本桐壺巻十オ9行目↪ウ1行目。違いナシ】／河内本くれまどふ心の闇も、かたへはるくばかりなん、いと聞えまほしう侍を、(二二ノオ)【尾州家本。違いナシ】武田氏は「意味の上からいえば河内本がはつきりしている」と述べている。前拙稿「陽明本源氏物語後編の改竄」¹⁹二五七～二五五頁で、陽明本の本文に言及なさった論文ではなかったのに拘らず取り上げたため、敢えて本拙稿では取り上げなかったが、吉岡氏は、「……かたはしをたに……」という青表紙本文と、「……かたへ……」という河内本文の古態性／非古態性について、「かたはし」二〇例以上、「かたへ」二〇例以上に基づいて、「……かたはしをたに……」が古態性を持つと結論を出している。

●第五節の8番

青表紙本その品々やいかに、いづれを三つの品に置きてか分くべき。【大島本帚木巻十オ9行目↪ウ1行目。違いナシ】／河内本その品々やいかに、いづれをかみの品に置きてか、みつに分くべき。(五ノオ)【尾州家本。違いナシ】(以上、武田氏の

異同箇所提示について、紙幅の都合に拠り、レイアウトを変更した)

武田氏は「吉澤博士が対校源氏物語新釈でいつて居られるように河内本の方が調子も自然で意味もよく通ずる」と述べているが、どのような女性を上品の品に置き、また、どのような女性を中の品に、どのような女性を下品の品に置くか、という意味なら、青表紙本の本文でも通じないことはないだろう。

その他、武田氏が「河内本の方が自然である」、「河内本をとるべきであろう」とする●第三節8番、●第三節10番、●第四節4番、●第四節11番、●第四節12番、●第四節13番、●第四節16番、●第四節19番、●第四節21番、●第四節29番、●第四節33番、●第四節37番、●第五節2番、●第五節5番、●第五節6番、●第五節11番、●第五節12番、●第五節13番、●第五節15番、●第五節16番、●第五節20番、●第五節21番、●第六節の1番から7番まで、●第六節の10番から24番までについても、青表紙本側が恣意的な書き替えをした決定的な根拠になっていない。

河内本系諸本の最善本として用いられてきた尾州家本は、伝清水谷実秋写の補写十三帖と、古写四十一帖とに分けられる²⁰。

後者の四十一帖のうち、第一帖桐壺については、吉岡氏の著書に尽きて居り、私が第二帖から第九帖、第一一帖から第二二帖迄について、尾州家本の非古態性を明らかにした。

なお、「異同箇所その12」に於いては、形容動詞「まほなり」の用法に基づいた考察をした。二〇二二年春、中古文学会口頭発表「陽明本源氏物語初期五帖の本文の疵と物語世界」の、夕顔卷中盤の異同箇所の考察もそうであった。

二〇二二年春、中古文学会口頭発表でも「青表紙本——古態性を持つ 非青表紙本は書き替えによって生じた本文」ということを述べたが、その際の非青表紙本とは、別本の陽明本である。この発表に関して、表現性の優劣を古態性／非古態性と結びつける発想がある、との匿名の批判があった。しかし、初期五帖のうち夕顔以外の巻の本文異同に対する見解、夕顔卷の序盤の異同箇所に関する見解は、思文閣出版の陽明本影印²¹の解説を援用したもので、その解説者（桐壺から夕顔迄は阿部秋生氏、若紫を含む第二巻は玉上琢彌氏）に言うて欲しい。私の目から見ると、思文閣出版の解説は、適確な言説である。夕顔卷中盤の異同箇所では、「まほ」の夕顔卷以外の五十三の巻の用例に基づき、「まほ」に「聞く」が接続する非青表紙本の本文は、非古態性を持つという論断をした。非匿

名で、批判を賜りたい。批判を賜ったとき、「まほ」の二桁の用例に基づき、再反論したいと思う。

形容動詞「まほなり」に、「視覚的に用いられる、動詞で言う」と「見る」やその類義語と一緒に用いられる」という特徴と、「聴覚的に用いられない、動詞で言う」と「聞く」やその類義語と一緒に用いられない」という特徴があることを、私は語彙用例総索引などを駆使して、知った。鎌倉時代の人々は、語彙用例総索引やその類のものを駆使していなかったのではなからうか。『源氏物語』を何回か通読するだけでも、前者の特徴には気付き、無意識のうちに、頭の中にそうした認識が定着するということは考えられなくもない。しかし、後者の特徴は、語彙用例総索引やその類のものがなくして気付くことはないだろう。従って「まほならざりしかとほのき、しかは」のような本文を藤原定家が見て、「まほなら」ず、と「聞く」系の動詞が接続するのはおかしいと判断、「まほなら」ず、の下に、「聞く」系以外の動詞が来るように書き替えた、とは到底想定できないのである。

第三章 非古態性を持つ伝本を読むことの問題性

前章では、尾州家本古写の巻四十一のうちの、初期十一帖が恣意的な書き替えによって生じた系統であることを述べた。従って、今後作成される校注書は底本青表紙本がいいだろう。

ところが、河内本が紫式部の原本を忠実に伝えていないことを承知の上で、それでもやはり、河内本底本の注釈書を作成すべきだという向きもある。『源氏物語』享受のありようを知るためとでもおっしゃるのだろうか。

しかし『源氏物語』専門家の第一の仕事は、紫式部の思いを伝えることである。鎌倉時代なら鎌倉時代に『源氏物語』がどのように享受されていたか、鎌倉時代享受者の思いを知ることが、必要不可欠なことではない。そして、非青表紙本を読むのをオプセクションにするのは間違っている。

たとえば、第五帖若紫巻。巻の前半から紫上とその周辺の人物について、河内本系尾州家本では敬語が付き、青表紙本では相対的に敬語が少ないことを、中村一夫氏「若紫巻の本文―源氏物語別本の敬語法―」²²は、指摘する。そして、中村氏は、次のように述べる。

……確かにそうした表現を持つ本文【初登場の人物を、初めから敬語で待遇する本文】は情報量が多く、客観的でわかりやすい本文であるといえるかもしれない。河内方がその校訂方針として不審箇所をなくそうとしていったことが想起される。しかし、それが物語の表現として優れているかといえ、否定的にならざるをえない。大島本の本文は作中人物の意識にそったものとなっており、主観的に追体験しやすいため臨場感のある表現になっている。他の伝本のように始めから敬語で待遇されていると、徐々に未知の人物の正体が解き明かされていくというおもしろみに欠ける表現となってしまう。【略】私は青表紙本の敬語のありかたがより古い形を伝えていると判断する。

うっかり河内本系尾州家本で若紫巻を読んでもしうと、「徐々に未知の人物の正体が解き明かされていくというおもしろみ」を味わえなくなる。二本対照の活字校注書が編纂されて、河内本がその対校本に使われるときも、その点同じことになる。推理小説がAという出版社から出版されたとき、仮に親切なA社社員がページ目に「真犯人は誰それです」と記してしまつたら、徐々に真犯人を推理してゆくおもしろみに欠けた本になってしまうのと同様である。他の巻についても、非青表紙本を読むことは、敬語とは違う面で、紫式部の思いを受け止めるうえで、多かれ少なかれ、障害になるように思う。非青表紙本を読むことについて、私は「しなくても良いこと」であるのを超えて、「しないほうが良いこと」であると考え。まして、全巻河内本を底本とした新校注書を（本文研究の研究者向きではなく）一般国民向きに作成するのは、しないほうが良いことの一つである。少なくとも、第一帖から第九帖、第一一帖から第一二帖、併せて十一帖は、河内本を底本にすべきではない。

ちなみに、中村氏は、『中古文学』誌所収の前掲論文を単行本²³に再録する際、「私は青表紙本の敬語のありかたがより古い形を伝えていると判断する。」を削除している。少なくとも、「四」の直前には、この一文が無かった。しかし、青表紙本が河内本より古い形態を伝えていることは、本拙稿の異同箇所その6からその9、その11からその12迄に拠つても、明らかである。

注

1 二〇一四年一月

- 2 笠間書院
- 3 武蔵野書院、二〇〇八年。
- 4 『富山大学人文科学研究』第七九号所収。二〇二三年八月。
- 5 角田文衛氏・室伏信助氏監修。角川書店、一九九六年。
- 6 八木書店、二〇一〇年～二〇一三年。
- 7 『源氏随攷』所収。晃文社、一九四二年。
- 8 『大阪大谷大学』第五一号所収。二〇二二年三月。
- 9 久保朝孝編『危機下の中古文学2020』所収。武蔵野書院、二〇二二年。
- 10 『古今和歌集』の引用は、小学館発行新編日本古典文学全集『古今和歌集』に拠った。
- 11 『源氏物語』の鑑賞と基礎知識 若紫（至文堂、一九九九年）一四三頁鑑賞欄「紫の君への消息」
- 12 ここで引用は、岩波書店発行新日本古典文学大系『源氏物語』に拠った。
- 13 注12に同じ。
- 14 夕顔巻にも、「……まをにみなす……」（青表紙本系大島本第四丁オ）対「……まことに見なす……」（河内本系尾州家本第三丁オ）の本文対立がある。
- 15 形容動詞「まほなり」の性質に照らし合わせて、青表紙本は、非常によく通じる、河内本は、非古態性を持つ、と私は考えている。しかし、物理的な理由により、「まほ（或いは、まお、まを）」が「まこと」に変化した可能性が排除できないため、河内本側の恣意的な書き替えの例として本拙稿本篇で挙げることを躊躇した。
- 16 注7に同じ。
- 17 塙書房、一九六八年。尚、今井上氏「紅葉賀の行幸―平成の『源氏物語』研究の源流をさぐる―」（『危機下の中古文学2020』。武蔵野書院、二〇二二年）は、この清水好子氏『源氏物語論』を批判する。私は、今井氏のほうを支持したい。しかし、それとこれとは話が別である。仮に準拠のことを忘れて判断することにしても、花宴巻頭との照応から、河内本が非古態的であると考え。巻頭では、書写者はある程度の緊張感を持って書写すると考えられるため、青表紙本製作者が「のほと」を見落とした／河内本製作者が「のほと」のような文字を付け加えた、とは考えにくい。
- 18 『源氏物語の研究』所収。岩波書店、一九五四年。
- 19 柳井滋氏室伏信助氏大朝雄二氏鈴木日出男氏藤井貞和氏今西祐一郎氏『源氏物語』第一巻（岩波書店、二〇一七年）。今井久代氏、陣野英則氏、松岡智之氏、田村隆氏、編集協力。
- 20 注4に同じ。
- 21 山岸徳平氏『尾州家河内本源氏物語解題』（尾張徳川黎明会、一九三五年）。その再版本（貴重本刊行会、一九七七年）に拠った。第八章第二節。なお、

河内本源氏物語の改竄―尾州家本古写巻初期十一帖を中心に―

- 21 一六二頁に拠れば、補写は清水谷実秋筆と伝えられているけれども、その点、明瞭ではない。
『陽明叢書国書篇 源氏物語』全十六卷。一九七九年～一九八二年。
22 『中古文』第四八号所収。一九九一年二月。
23 『源氏物語の本文と表現』（おうふう、二〇〇四年）

【二〇二五年三月二四日提出】